【89】

氏　名（本籍）	佐東大作（福岡県）
学位の種類	博　士（経営学）
学位記番号	博甲第 5610 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**ハイエクの経済思想** －企業家の倫理と市場秩序－

主　査	筑波大学教授	Ph. D.	仲　重人
副　査	立正大学教授	博士（経済学）	小畑二郎
副　査	筑波大学教授	Ph. D.	篠塚友一
副　査	筑波大学準教授	経済学博士	平山朝治

論文の内容の要旨

本論文は、F. A. ハイエクの経済思想を、自生的秩序の概念を中心として経済思想史・学説史の視点から解釈することを試みたものである。

第 1 章では本研究の背景的関心と問題設定とが述べられる。ハイエクをいわゆる新自由主義者と位置付けるような解釈に対して、ハイエクの主張する市場秩序と新自由主義的な市場観とは異なるものだとする視点から異議を唱え、本論文全体に渡る議論の方向性を示している。

第 2 章では第 1 章での問題提起を受け、市場と対置される非市場的な組織に関するハイエクの議論が考察される。まずハイエクの企業家についての見解を検討し、次いでオーストリア学派の市場観を援用しつつ、分散した知識の有効利用というハイエクの最重要な主張のひとつを取り上げ、その主張の意義について論じている。さらにハイエクにおける政府の位置づけに触れ、市場の秩序形成と発展に対して政府がもつ役割が考察される。ここで注目すべきなのは、政府もまた自生的に発生してきたとする見解であり、この見解を検討するためにマンカー・オルソン、ロバート・ノージック、デイヴィッド・ヒュームらの国家論を用いた議論が行われる。そして最後に、企業や政府を含めた非市場的な組織と市場とがいかなる関係を結んできたかについて、ジョン・ヒックスが『経済史の理論』で行なった、非市場組織における慣習経済と指令経済との関係についての議論を参照し、これをハイエクの自生的秩序論につなげる試みがなされている。

第 3 章は本論文の中心章である。自生的に生成してきた社会「秩序」（コスモス）と、設計的につくり出されてきた秩序である「組織」（タクシス）とが対比されるが、ここで強調されるのは、ハイエクがこの両者を単なる対立的な構図のみで捉えたのではなく、対立的でありつつも互いに補完し合う関係にもある（このような関係を本論文では「相補的」と呼ぶ）と見ていたとするハイエク解釈である。まず、自生的秩序と設計的秩序のそれぞれを形成する 2 種類のルール（ノモスとテシス）が考察されるが、2 種類の秩序の対立性を際立たせるという意味でも、ここではこれらの 2 種類のルールが性質上は対立的であることに力点を置いた議論がなされている。次いで、それらのルールから生成された 2 種類の秩序は内部構造的には対立しつつ、しかしその成長には相互の補完性が不可欠でもあるという見解が示される。そして、両者の補完的な関係を説得的に述べるためにハイエクが市場を自生的秩序の参照点としていたことが指摘されるが、ここで第

2章での市場と非市場組織との関係をめぐる考察が活かされている。

第4章では、ハイエクの自生的秩序論に対して提出された批判のいくつかが取り上げられ、それらへの応答が試みられる。この章ではハイエクが示した文化的進化の概念が議論の俎上に乗せられるが、社会秩序の文化的進化というハイエクの見解に批判的なヴィクター・バンバーグの議論が検討される。ハイエクは方法論的個人主義を思想的基盤のひとつとしたが、ここで想定される個人のあり方について、ヴァンバーグの理解には問題ありとの応答が示される。ハイエクは合理的な利益追求のみを行動原理とするモデル化された個人を想定したのではなく、誕生してから成長していく過程で様々な非市場組織（家族や地縁集団など）との関係を結びつつ慣習や伝統を背負った存在としての個人像を想定しており、このように単純なモデルでは捉えきれない個人のあり様を、自生的秩序を成長させる原動力としてハイエクが重視していたという解釈が強調して述べられる。また同時に、伝統や慣習などの自生的な制度から時に逸脱し、それが新たな制度の発見を促すというハイエクの見解が同時に取り上げられる。このような実験的行動を、市場をダイナミックに動かし続ける企業家の存在と重ね合わせ、個人のもついわば「企業家的精神」を、ハイエクの文化的進化概念において特筆すべき主張であるとする解釈が示されている。

第5章ではこれまでの議論が総括される。自生的秩序と設計的秩序との相補性、また伝統や慣習を含むルールの遵守とルールからの逸脱という矛盾するかに見える行為が、実は相補的な効果を生むことで自生的秩序の成長が促されること、これが文化的進化に見出される相補性であることが確認される。最終的には、これらの相補性が人間の不確実性への対処として現れてきたとする見解が述べられ、経済思想史的な視点からの総括を行なうことで議論が締めくくられている。

審査の結果の要旨

本論文の意義は、まず、ハイエクを市場経済の極端な信奉者とみなす一般的な解釈に一石を投じた点にある。これは本論文筆者も意図しているように、新自由主義批判の文脈から行われる市場経済批判に、経済思想史的な視点から対抗しうる可能性を示している。「秩序」と「組織」の関係を単純な対立で捉えず、それどころか両者が補完し合う関係にもあるとするハイエク解釈は躍動的であり、ハイエク研究の新たな地平を切り拓く印象すら抱かせる。もう一つ認められる意義は、ハイエクの経済思想における企業家の位置づけに関して、新たな主張を展開した点にある。これは従来ほとんど触れられてこなかった着眼点である。ハイエクは企業に関する論考をほとんど残していないが、本論文で示された企業家的精神なるアイデアは、ハイエクの議論を企業論あるいは企業家論の視点から読み直す契機にもなると考えられる。この点は本論文筆者の今後の研究の深化に期待したい。

ただし、議論全体を見渡して指摘されるべき弱点は、本研究と先行研究との関係の指摘及び対比の薄さにある。ハイエク研究の蓄積は膨大なものであり、それを本研究が背景としていることは理解できるが、先行研究に対抗する挑戦的試みという学術的意義を強調するならば、従来のハイエク研究を包括する議論をより積極的に取り入れるべきだろう。また、自らのハイエク解釈のオリジナリティを強調するあまり、同様な解釈を基調とするハイエク論にもあまり触れられていないが、この点にも若干の課題を残している。ヒックス等の議論を援用している点に視野の幅広さを感じさせはするが、同時代のハイエク研究の到達水準を見渡すならば、やはり先行研究を踏まえるという態度をもう少し示す必要があるのではないかと思われる。

とはいえ、自生的秩序の成長を市場発展の歴史から説こうとしたと見るダイナミックなハイエク解釈は、まことに興味深いものであり、このような解釈を示しえた点は、本論文筆者の優れた研究能力を示すものとして認められるべきだと考える。

よって、著者は博士（経済学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。